

○タイトル
母の秘密

○著者名（ペンネーム）
永田

○あらすじ
福原将兵の元に二人目の母親だった直子の
姉と名乗る女が現れる。

女は将兵の子供のころの帽子を持参していた。
直子は三年ほど将兵の母として、今は将兵と
は疎遠となっている実父と、三人で暮らした
女だった。

その直子の過去について話す伯母。将兵は直
子の秘密を知り、大きな衝撃を受ける。

○本編の文字数
4979文字

貯めてしまった移動費などの経費精算を終えて外に出ると、街はすっかり夜の顔になっていた。

昼間に貯めた熱をコンクリートが放出し続けるオフィス街には生温く湿っぽいビル風が吹き続けている。

蒸すなと思いつながら、憂鬱に足を踏み出すと、中年の女が目の前に立った。知らない女だった。

「いきなりすみません。私、あなたのお母さんだった直子の姉です。どうしても、あなたに渡したいものがあつて」

母だった女・・・化粧が派手で、香水の匂いがきつくて、やたらと明るくて豪快に笑う、あの女。

何も言えずにいと、女が鞆の中から何かを取り出す。それは、古い野球帽だった。小学生のとき、大事にしていたのにいつの間にか無くなっていた僕のものだった。

実母は小学校一年生の時にガンで亡くなった。それから運送会社で經理の仕事をしていた父と二人で暮らしていた。

父は無口で、決して明るい男ではなかった。父は家事や僕の世話を頑張ってくれていたが、仕事に疲れ、時間に追われ疲弊していくのが、子供の目からみてもわかった。

それがわかってはどうすることもできず、せめて父を困らせるだけはしないようにせねばと息を詰めるように生活していた。

そんな生活が三年ほど続き、ある週末、父が客を招いた。

「直子です。将兵くん、よろしくね」

アパートに上がってくるなり、女は僕を抱きしめた。いきなり抱きしめられて、驚きのあまり女のことを軽く突き飛ばしてしまい、父に怒鳴られた。

「ごめんごめん、いきなりで驚いたよね。こんな派手なおばちゃんに触られて」

こくりと頷くと、女は今度はゆっくりと包

むように僕を抱きしめ、

「よろしくね、将兵君」

と耳元で囁いた。今度はそれほど嫌でもなくて、抱きしめられながら僕は、女の匂いの中に母と同じ匂いがないかを探した。

「直子の姉」は伊藤道子と名乗り、突然の訪問を詫びた。そして、先ほど同じように鞆の中から帽子を取り出す。

「直子の遺品の中にこれが」

二人の間に置かれた帽子を凝視する。でも、手に取る気にはなれなかった。黙っていると、道子は帽子の隣にあるものを置いた。

「妹があなたのために毎月貯めていたものです。少ないですけど。受け取っていただけますか？」

古びて色が抜けた通帳には黒い印鑑が添えられていた。

何も返せずにいると、ばつの悪そうな顔をして、道子がアイスコーヒーに口をつけた。

父に連れられてきた直子は、毎週末のように家にやってくるようになり、アパートに泊まるようになり、そんな生活が半年も経った頃、僕の新しい母親になった。

母は毎日明るかった。大きな声で、父と僕を起こし、職場や学校に送り出し、家事や料理や洗濯をして、また僕らを迎え入れる。

母はそんな生活を楽しんでいるように見えた。

野球帽はよく見ると塩を噴いたように白くなっている部分もあった。

それが自分の汗か自分のつけた汚れなのかは当然思いつけない。母はこれを洗わず持っていたのだろうか。

「あの、僕のことはどうやって？ 父に、ですか？」

「あ、いや、違います」

じゃあ興信所か何か使ったのだろう。それ

ならそれでいい。父に聞いたのではなかった
ようだ、ちよつとほつとする。

「お父さんは、お元気ですか？」

「たぶん・・・元気だと思います。あまり会
っていないので。父には新しい家庭もありま
すので」

関西の大学に進学するために鶴見の家を出
ていくときに、父に言われた。再婚して、埼
玉に住むと。

「おまえも新しい道へ進め。もう別々に生き
よう。俺たちはたぶんそのほうがいい」

母が亡くなり、新しい母の直子も三年ほど
で家を出た。

それから二人、何もなかったように、何も
起こらなかったように、互いの傷を確かめ合
うこともせず、ただただ何も波風が立たない
ようにと暗く息をひそめるように男二人で暮
らしてきた。

父もそんな生活にピリオドを打ちたかった
のだと知ると、かえってほつとした。

大学を出て工業用の大型機械メーカーに就職し、東京本社の配属になり、営業マンとして働き始めて三年が経ったが、父にはまだ連絡していない。

再婚相手には、まだ高校生の息子がいるはずだ。父は子育てをやり直している最中なのだと思うと、邪魔になるようなことはしたくなかった。

「再婚されたんですね」

道子の口調が少し尖ったような気がした。

「あの、母はその後、再婚は」

「してません。磯子に戻ってきて、小さなスナックでまた働き始めて、そこをママから受け継いでそのまま」

母が水商売の女だったことを、中学を出るところに近所の人に聞いて知った。母が父の飲み仲間と浮気をして、家を出ることになったこともだ。

「直子のこと、恨んでるでしょうね。でも、あの子にも事情があったんです」

道子の口調が明らかに強くなる。

「はあ」

今さらそんなことを言われてもと思う。正直、二人の母を思い出すことも、もうなくなっている。

「あの子は、おしゃべりなようで大事なことは人に話せなくて、自分の中に溜め込んで・・・いつも笑っていたのは、不器用だからです。明るくしてたのは、そのほうが少しはましだって知ってたから・・・」

何を言いたいんだろう。

「妹は、直子は、ほんとに地味で、大人しくて、いつも私の影に隠れてるような、そんな子だったんです」

初めて会った義理の母親の姉の中には、誰にもぶつけられない気持ちがあるようだった。でも、そんなものをいきなり提示されても困る。

目の前の野球帽や通帳と同じように、それに手で触れていいのかもわからない。手に取

りたい気持ちにも正直ならなかった。

「直子は結局、一人で乳がんで亡くなりましたけど」

実母を蝕んだ病と同じものが、二人目の母も襲った。

だからと言って、二人の中に共通点を見つけることは、初めて直子と会った日と同じように、やはりできないのだった。

母と二人で神社に行ったことがあった。今のような夏の盛りの蒸し暑いころだった。

父が入院中の会社の上司を見舞うために保土ヶ谷にある大きな病院を訪ねるのについて行き、二人で先に帰ったときのことだ。

「ちよつと寄り道しよっか」

母はそう言い、僕の手を引き、横浜駅でバスを降りた。普段は見ないような人の群れの中で、急に不安になった僕は、母の手をぎゅっと握りしめた。

住んでいる町では人目を気にして、決して

手を繋がなかった僕のそんな手を、母はさらに強い力で握り返してくれた。

母と川沿いの道を歩いた。長い時間だったようにも、短い時間だったようにも思う。

長い階段を登った先に赤い鳥居のある神社に参った後、母とかき氷を食べた。

「美味しい？」

「うん」

「そっか。うん、美味しいね」

厚く塗った化粧を汗で流しながら、そう言
って笑う母の赤い紅を見て、先ほど参った神
社の鳥居を思い出していた。

母のことを初めて頼りにした日のことだと思
う。

「根岸渉。お父さんの会社の後輩で、家にも
来てた人いたでしょう？ ああ男がいけない
のよ」

何を言いだすのかとぎよっとする。根岸の
おじさんは、父の勤めていた運送会社のドラ

イバーだった。経理部だった父とはどういったいきさつで仲良くなったのか知らないが二人は仲が良く、根岸のおじさんは家に来ることもあった。

おじさんは、年は同じなのに、父よりずっと後に入社したということもあり、父のことを「先輩、先輩」と呼んでいた。

「直子の最初の結婚相手は、根岸なんです。あの子は根岸と結婚して、子供が産めなくて、家を追い出された。それもひどくいじめられて。早く帰ってくれば良かったのに、あの子は我慢して、我慢して、やっと家に帰って来た。かわいそうにね」

何も返せずにいると、道子が続けた。

「それでスナックで勤めるようになった。地味でおとなしかったのに、派手な服を着るようになった。化粧も派手にして。自分を変えたかったのかもしれないわね。直子は最初の結婚に失敗して、もう結婚はしないって言うた。でも、あなたのお父さんと出会って、

嫁ぐ気になった。普通なら、相手に子供がいることで躊躇するんだろうけど、あの子は喜んでた。自分が子供を産むことができなかったから」

「父と母はどうやって知り合ったんですか？」

「直子は磯子の、実家の近くのスナックに勤めてたの。そこにあなたのお父さんもちよくちよく顔を出すようになって。磯子の倉庫に來たときに会社の人に連れられてきて、それで寄るようになったみたい。そして、縁もゆかりもない鶴見に嫁いだら、お父さんの会社に転職してた根岸と再会した。驚いたでしょうね」

確かに驚いただろう。

「根岸は何も知らなかったお父さんとあなたに自分たちのことを話すぞと言って、直子に関係を迫った。自分の過去を隠したかったあの子は、根岸に屈した。バカな話よね。バラされて困るのはむしろ根岸のほうなのに」

「どうして、母はそこまでして」

「それは」

初めて女の齒切れが悪くなる。言おうかどうか迷っている様子だった。

「あの子・・・母親になる女に傷があっちゃいけないって。母になる女に傷があると、子供を傷つけてしまうって、そう思ってたみたいで」

「傷、ですか？」

「ええ。あの子、直子にとっては、それが自分の不幸な過去だったんでしょね。それが、あなたを、自分の子供になる者を傷つけてしまふ、くるしめてしまふと思ってたみたいで。馬鹿ですよ。そんな完璧な母親なんて、この世のどこにもいないのに。でも、それぐらい・・・直子にとって、あなたはとても大事な存在だったんです。たぶん、あなたのお父さんよりも、ずっと」

初めて知る母の過去や気持ちに触れ、今は驚きしかなく、やはり何も返せない。

「子供のできない妹にとって、あなたはほん

とに唯一の子供だった。でも、そんなこと言われても、あなたにとっては迷惑な話かもしれないけど」

「そんなことは」

「いえ、あの子の勝手な事情ですから」

何かを断ち切るように、母の姉が言い切り、こちらから視線を反らした。目の前の女は、複雑に絡まった迷いを捨てるために会いにきたのだと理解する。

「そうなのかもしれません。でも、あの頃は理解できなかったかもしれませんが、今なら、少しはわかる氣もします。母の、そういう氣持ちも」

再び視線をこちらに戻した母の姉は、
「これ、少ないですけど、受け取ってください。あの子が働けなくなるまで、あなたのために、月に二万円ずつ貯めていたものです。お願いします。私が持っているわけにもいかないので」

伯母が頭を深く下げる。受けとらなければ

引き下がらないだろうことは、すぐにわかった。

「わかりました」

頭を下げたままの伯母の前に置いてある本来の色を失った通帳の表紙を見て、母について何も考えない間に、時間が長く長く流れてしまったことを知った。

伯母と話した後、仕事中のビル街で理由もなく足を止めるようなとき、いつも明るく、過剰にスキシップをとりたがり、大袈裟なほどの声をあげて僕の言ったことや動作に反応してくれていた母を思い出すようになった。

母は何も考えていないように見えたが、それは僕が子供だったからだと思い知る。

初めて母の傷に触れ、そうかと思う部分もあれば、見知っていた母のイメージとはどうしてもうまく被らない部分もあった。

必死に母のことを思い出そうとしても、もう思い出せないというのもある。

ただ、必死に自分の母になろうとし、その後も思い続けてくれた母の気持ちを思うと、なんともいえない気持ちになる。

ぎゅっと胸を捕まれるような痛みにも、照れ臭かったりくすぐったくなるような、子供のときに抱いたようなせつなさも混じる。

それを誰かに伝えたいと思っても、不器用だった母と同様に、それを伝える言葉は僕の中には浮かんでこない。

ずっと忘れていたのに、父と三人で近所の銭湯に行き、帰り道ですっぴんになるとなぜか照れ臭そうに何度も顔を伏せて、いつもより小さく笑っていた母も思い出した。

その頬は、実母と同じように真っ白で、空に浮かぶ月に負けないぐらい輝いていた。

【終】